

加藤辨三郎 述

# 歎異抄

13

文責 本誌編集部



佛心は大慈悲

慈悲には、衆生縁と法縁と無縁の三縁があるといわれています。この三縁の分けかたのほかに、縁感分別と縁感分別なしに自然にあらわれる慈悲があります。自然にあらわれる慈悲を、大悲というのです。

縁感分別のほうは、細かく衆生縁と法縁と無縁とに分けてあります。衆生縁は、われわれの常識の慈悲です。たとえば、わが子が病気で苦しがつっていると、親は不憫におも

い、かわいそうだ、できれば自分が身代わりになってやりたいとおもう、これが衆生縁です。親子の愛情、夫婦の愛情、友人知己の愛情、それから社会生活をしてお互いに助け合うところの慈悲です。道徳なども、それはそれで立派なものです。これなくしては社会秩序を保っていけないとおもわれます。しかし佛教の深い慈悲の思想からいくと、まだ小さい慈悲と説かれているわけです。慈悲をみずからも実践しようとして、慈悲の容易ならぬことを体験した人たちが、慈悲にもいろいろあると身をもってさとしたの

だろうとおもいます。

つぎの法縁の慈悲とは、法を縁としての慈悲です。人間の体は色受想行識の五つの要素（五蘊）からなっています。その理（ことわり）をさとらせることによって、その人は五蘊の本質をさとることができるのです。このさとりを得て苦しみから解脱していきます。縁感分別するという差別感の上に立つた法縁は、中くらいの慈悲です。もっと大きな立場から見ると、まだ小さいといわれるのです。法縁を伝えられるのは、凡夫ではできません。やはり、声聞縁覚のように佛道修行の進んだ人とか、阿羅漢のような方、あるいは菩薩の位に入られた方、そういう者であつてこそ、はじめて人間はこういう構造でできている、人間のあり方はこのような原理だとさとらせることができます。わたしども凡夫には、知識として、確かに人間は五つの要素からなっている程度まではわかっていますが、それが慈悲に直結してくるのはわかりません。しかし菩薩は、かわいい、かわいいで、ちょっと欲しいものを与えるといったことでは駄目で、衆生を救わなくてはならないのです。

それから無縁の慈悲、これは空の思想を原理としています。この原理を縁としておこす菩薩、これこそが大菩薩の

大慈悲心だといつてあるのです。しかし、根本には、まだ差別感があります。それは菩薩であるとか、声聞であるとか、縁覚であるとか、凡夫だとかいう差別があつて、佛道が徹底していないと説いています。差別を超えた、一如平等という上になつた慈悲、これが大慈悲というのです。佛心とは大慈悲是なりです。

ともに泣き　ともに喜び

なお、慈悲には二通り解釈があります。普通は、慈悲の慈は、樂を与えるほう、つまり与樂といひます。そして悲は悲しみを抜く、苦を抜くほう、つまり抜苦といひます。ゆえに慈悲は、抜苦与樂のことだといわれてきているのです。逆に、慈のほうが抜苦で、悲のほうが与樂だと説くのもあるのです。『教行信証』にも引用文が二通り出ております。これはどちらでもよいのかも知れませんが。ただわたしは、慈というのは慈しむと、悲は悲しむと読むのが普通ですから、やはり慈のほうが与樂で、悲のほうが抜苦であろうとおもいます。

金子大榮先生は、慈は、他人の喜びをわが喜びとすると  
いう意味であつて、他人が自分のなかに入つてしまうよう

な境地であるとおっしゃっていました。それから悲は、自分が相手の立場に入って行くのです。向こうが非常に悲しんでいるときに、その悲しみのなかへ入って行く。これがほんとうの苦を抜くことの内容ではないかとおっしゃいました。たとえば、子供をなくして泣いている母親に、法を説いて、「そう悲しみなさんな、もう死んだ者は返りはしませんよ、子供をなくした人はあなた一人じゃないのです。この世のなかには多くいるのです。もう、あきらめなさい」という。これは、ほんとうに悲しみを察していないことではないでしょうか。そんな説法をいうのではなく、何もいわなくても、こちらが一緒に涙が出てくる、一緒に泣くというのであるならば、相手のほうは、一番慰められるとおもいます。

わたしも十四歳のときに母をなくしました。悲しくて慟哭していました。すると人様がお悔みにいらっしやる。人様の顔を見ると、その都度、涙があふれる。お悔みの方も、この子が母をなくしてかわいそうだと、おもわず泣かれます。泣かれると、その方が一番こちらの悲しみを理解していただいたと、説明でなく体でわかるのです。そんなときの向こうの方は、わたしを向こうの体のなかへ取り入れら

れて、ともに悲しんでいくのださるのです。

これは越後の良寛和尚の話で、よく例に引かれて有名です。良寛の弟由之の子馬之助は、いわゆる道楽者で、親がいくら説教しても、道楽がやみません。そこで由之は、良寛に「お前さん、一遍来てせがれを説得してくれ、お前さんがいえば効き目があるだろう」と頼みました。良寛はその頼みを聞いて出雲崎の由之の家へ行ったのです。そして一週間ほど泊り、道楽者の馬之助と起居をともしました。しかし三日間いても良寛は、世間話ばかりで、ただの一言も説教じみたことはいわなかったのです。三日したら、「さあ、わしは帰る」という。「もうおじさん、帰るのか」「うん、わしもこの辺で帰る」、そして良寛がわらじを履く。良寛のわらじのひもを、かがんで馬之助が結びはじめました。その馬之助の手に涙がポタッと落ちた。驚いて馬之助が顔をあげると、おじさんの眼に涙があつた。それを見た馬之助は「ああ、おじさんが、わたしのために泣いてくれた」と、翻然として道楽をやめたのです。

さとりを開いて有名になっている良寛が、一言も説教をいわないで、ただ一滴の涙をこぼした。馬之助のために良寛が泣いているということは、非常な慈悲心ではありませ

んか。ともに泣く、ともに悲しむ境地が、いわゆる悲といわれるものではありませんか。その反対に、慈はともに喜ぶことです。入学試験にパスすれば、おじであろうが、縁者であろうが、みんなわがことのように喜びます。これはわたしたちの経験するところではありませんか。ともに喜ぶことこそが与樂ではありませんか。自然に随喜するのです。

### 怨親平等のころ

ちよつと話がとびます。去年、小倉でお話をしました。そして帰ろうとしたときに、名も知らないおばあさんが寄つて来られました。八十歳に近い方のようにお見受けしました。そのおばあさんが、「先生、わたしは理屈は難しくて何もわかりませんが、佛教は要するに四無量心だと教わっています。それでわたしは十分だとおもいますので、四無量心一本槍で信じております。しかし先生、それでよろしゅうございませうか」と質問されました。わたしは言下に「まことにあなたはお深い。わたしもそれで十分だとおもいます。慈悲喜捨ですね」というと「そうです」といっていられました。わたしは、その方が非常に深いところへ到

達していらつしやるとおもいました。

四無量心とは、佛の御心と説かれています。無量心は無量の心です。深くて底がない心、広くて広さがわからない心、四つの量りしれない利他の心です。

一番目は慈無量心。無限の力をお持ちになつて、一切の生きとし生けるものに喜びを与えてくださる心です。

そのつぎは悲無量心。悲が苦しみを抜く無量心。生きとし生けるものの一切の苦しみを抜く。苦しみを抜くのに不可能ということがない。このような無量の心をお持ちの方が佛さまというものであると説かれています。

それからつぎの喜無量心、これは一切衆生が苦しみから解脱して安樂を得た、それを見て非常にお喜びになります。その喜びも極まりがない。それが喜の無量心です。

つぎが捨無量心。これは文字どおり捨てる。いままでの三つはよく樂を与え、苦を抜き、苦を脱し樂を得たのを見て、喜びにたえない。この三つを捨てるのです。捨てられることは、とらわれのないことです。あれに樂を与えてやったのだとおもわれないのです。あれの悲しみを抜いてやったことも忘れ執着していません。あの苦しみから逃れたことを喜んでやったという心は、もうすでないのです。

そして怨親平等で、怨みをすっかり捨てていけるのです。怨を捨てる心が無量であります。怨親などの差別のすがたを捨てて平等に利するのです。怨みを捨てるのはいいことだとおもいます。できればそうありたい。だが実際は、なかなかそうはいきません。凡人はいつまでもこだわって忘れかねるのです。

そのおばあさんは、おそらくこの四無量心のうちで、怨みを捨てるところに非常な感銘をされたのではないかとおもいます。そしておそらく、怨みを捨てることを、体でもってさどっていられるのだなおもいました。『法句経』には、怨みに報いるに怨みをもつてしては、怨みは永遠に尽きないとあります。

### 自然の光り

慈も悲も、究極すればむしろ捨に入るとでもいいでしょう。とにかく慈悲は、慈悲喜捨のことだと考えていいとおもわれるわけです。それで先に差別感の上に立っても衆生縁あり、法縁あり、無縁の慈悲があるともうしました。しかし差別感をもたないで、自然にあらわれてくる平等感にも、衆生縁と法縁と無縁というものをいい得るのです。

縁を感じないけれども、衆生を救う慈悲が自然にあらわれてくるのです。法縁は人間の体は五つの要素からできているというような法を、わざわざ観察しなくても、自然に照らされている光を感じます。これが平等感、差別感を脱却したところの法縁の慈悲です。無縁は、佛教で究極の真理は真如と説かれていますが、その真如さえも観察することなく、自然にその真如の境地に安住する、それが無縁の慈悲というものです。しかもこの縁感、つまり差別感の上に立つのが縦の慈悲、あるいは縦の三縁で、後者が横の三縁だといわれるのです。

前月ももうしましたように宇井伯寿先生の辞書によって、このように教えられました。わたしたちは、簡単に慈悲、慈悲というけれども、わたしたちがいう慈悲と違って、深く、もつと自然で、本来そうあらしめられるというものだとおもわせられたしだいです。

なぜこのような学問的なことをもうすかといいますが、慈悲はたいへん深いものだということをご承知願っておきたいのです。それで、はじめて聖道・浄土の慈悲ありと親鸞聖人がおおせになるお言葉がわかつていただけるので